

本論文の平安後期とは、一一世紀後半の後冷泉朝前後を指す。これは狭義の用い方である。この時代は一世代前の『枕草子』や『源氏物語』の陰に隠れがちであるが、多数の作品や作り手、たび重なる歌合の催行等が確認できるような、仮名文芸が盛んに生成・享受された時期であった。代表的な作品に、『更級日記』や『狭衣物語』等がある。

本論文は、この時代の文芸をめぐり、作者及び同時代の読者の、有機的な関連を考究するものである。同時代における複数の作者達と読者達はいかに関わり合い、それがいかに作品の生成と享受に影響を与えたのかという問題を究明する。特定の作品や作者に限定された研究ではなく、この時代を総体的に捉えた複数の具体的な事象の指摘、及び考察を積み重ねること、平安後期ないしは後冷泉朝という時代の特徴がより解明されるだろう。

後冷泉朝期は、藤原頼通を中心とした、対立のない「融和」「共有」の時代であったと長らく認識されてきた。この認識は妥当であり、文芸においてもそのような特質が認められるようである。

しかし、同調的、協調的な時代性という認識が浸透しすぎるあまり、個別の事象に対して、先入観をもつて見てしまう弊害も生じうると考えられる。稿者は文芸の生成と享受にじかに携わる、作者や読者、作品群といったものたちを広く取り扱い、時代の中でのそれらの個性を論じる。個別性の指摘は、広い視野から見た時代の断片であり、これらの積み重ねが文芸の様相を総体的に究明することの方途となるからである。

本論文は、『更級日記』とその作者菅原孝標女を中心に据えた第一部と、作者や作品にとらわれることなく、よりいっそう横断的に検討する第二部という二部構成をとり、それらが互いに補完しあうよう図った。

第一部 『更級日記』と孝標女の時代

『更級日記』は菅原孝標女の作と伝わる仮名日記であり、女性の半生記という体裁をとる。日記文学がそもそも実在の人物達の記録の宝庫であるのに加え、『更級日記』は紀行等の多様な叙述を有する。『更級日記』は後冷泉朝前後を研究するにあたり、横断的な研究方法によつて有効な成果を多数提供しうる作品である。

第一部では、孝標女が関係した周辺人物や孝標女の読み手への意識等を探り、『更級日記』がいかなる時代に生まれたのか、いかなる時代が『更級日記』を生んだのかという問題を考察した。

第一章 「殿の中将」藤原長家と祐子内親王家

『更級日記』には、藤原道長息男の長家が「殿の中将」の呼称で点描される記事がある。これは『栄花物語』等にも詳述される、長家が妻を失った有名な悲劇の場面である。先行研究において長家はほとんど注目されてこなかったが、彼は後年孝標女の出仕する祐子内親王の別当になっているのである。

長家は関白道長の末子的存在であり、摂関家の一員という身分に加え、貴顕でありながら和歌に執心していた。孝標女が出仕した祐子内親王との縁も深く、別当就任の他に、祐子が連なる定子系と藤原行成系との紐帯に組み込まれる人物であった。また、祐子家主催のものを含む複数の歌合に参加して詠出したこと等も注目され、特に詠作に関しては自負を持っていたとおぼしい。

以上のことから、長家は祐子家やその周辺の人々にとって重要かつ印象深い人物であり、孝標女は自身と長家の意外なつながりを日記に記し、それにより日記を読者達により親しみやすいものとしようとしたのではないかと考えられる。

第二章 浮舟と「隠し据ゑ」——『浜松中納言物語』との相互性——

『更級日記』では、『源氏物語』において山里に「隠し据ゑ」られた浮舟の境遇が、将来の夢とされるも、のちにそれは実現不可能なことで痛感される。一般的に、孝標女は浮舟に強い思い入れを持った人物と考えられてきた。

しかしこの問題は、孝標女の『源氏物語』受容と物語創作を究明するための、より重要な方途となりうる。この時代の女君を「隠し据ゑ」という用例は、『源氏物語』『更級日記』『浜松中納言物語』の三作品のみに集中しているが、『浜松中納言物語』は孝標女の作と伝わるにも拘わらず、先行研究においては「隠し据ゑ」の検討が不十分であった。

孝標女の「隠し据ゑ」の用例群は『源氏物語』を踏まえた上で、『更級日記』は「願望」と「実現不可能」、『浜松中納言物語』は「未遂」対「実現」という、成否に関して相反する構造をいずれも有している。

このことから、同一作者による両作品の相関性は、当時の読者達に互いを想起させあうような効果をもたらしただろうと考えられる。また、これは孝標女の『源氏物語』に対する意識の表れとしても読者達に注目されたと考えられる。

第三章 長谷寺記事と菅原道真

菅原孝標女は、菅原道真直系の子孫だが、『更級日記』中に道真への直接的な言及は存在しない。日記中から道真に関する記述を見出しうるかといった問題は、先行研究でもしばしば論じられてきた。長谷寺関連の記事は日記に頻出するが、いずれも孝標女の人生と深く結びついている描写がなされる。これを寺社縁起類等と考え併せると、孝標女と父祖道真とのつながりが見えてくるようである。

一二世紀初頭から一三世紀後半の成立とされる『長谷寺縁起文』と『長谷寺密奏記』は、いずれも道真が作者に擬されており、道真にまつわる靈験譚も収められている。また長谷寺

隣地には與儀天満神社も存在する。さらに、長谷寺は十一面観音を本尊とするが、現在の大宰府天満宮である安楽寺も古来より十一面観音靈応の地とされ、北野天満宮でも神託により観音像が安置されたと記録される。他に、孝標女の兄弟基円は安楽寺別当となっていた。

以上のことから、孝標女は日記中の長谷寺記事において道真を間接的に記述しており、その間接的である要因に関して、当時天神が菅原氏の氏神や国家安寧の神として広く信仰を集めていたため、家系を露骨にアピールするのがためらわれたからだろうと論じた。

第四章 源資通と「天照御神」「冬の夜の月」

『更級日記』の宮仕えの記事中に、源資通が登場する場面がある。ここでは恋物語のような、耽美的、虚構的な描き方がなされており、従来の研究も物語的な問題に重きが置かれてきた。しかし、資通の語る冬の齋宮の体験談には、神仏をめぐる宗教的、信仰的な題材が扱われているという点も同様に注目される。

まず、資通は齋宮の勅使を務めた体験談を語るが、伊勢の齋宮はすでに日記中で「天照御神」の祭祀場として紹介されており、かつ齋宮の神々しい描写は日記中の内侍所の描写と共通点を持つ。そして資通との談義では「冬の夜の月」の風情の有無も語られるが、これは他作品にも多数の用例が確認でき、資通の語りは「他人に批判される冬の月を、男主人公が愛して賞讃するもの」のパターンに分類できる。加えて資通の語る月は、異界を思わせるような信仰的な描写であった。

『更級日記』には、物語耽溺から仏教帰依へという筋書があり、物語と信仰という二項対立が常に付きまといている。しかし、源資通の場面のように、物語と神仏の緩やかなつながりも確認できる。

第五章 女房日記の踏襲と逸脱——主家賛美の欠如をめぐって——

『更級日記』後半に宮仕えの記事群がある。物語での記事や悔恨の記事においても主家周辺の事柄は断続的に記述されており、乳母願望と稲荷信仰などはその好例である。孝標女は祐子内親王家の女房であり、宮仕え記事は女房としての立場から書かれた、女房日記的な記事ともいえる。しかし、ここでは出仕先の祐子内親王とその養父・藤原頼通に関して、主家賛美の記述がことごとく欠如している。

『栄花物語』の祐子周辺の記述と比較しても、『更級日記』は主家の権威をアピールせず、寂寥感の描写に終始している。他に、『枕草子』『紫式部日記』、複数の女房家集と比較検討を重ねてみても、『更級日記』が主家周辺の記録や賛美を徹底して省筆していることがわかる。このような主家賛美の欠如は、当時の女房としては破格の姿勢である。

『更級日記』は第一に主家や主家に近い人々を読者対象としつつ、頼通を中心とした文化圏内の人々をも同質的な読者対象とするような日記であり、あくまで相対的にはあるが、権威をアピールする必要性が薄い状況にあった作品なのだろうと論じた。

第二部 後冷泉朝前後の作者達と読者達

後冷泉朝期は、前後の時代と比較して現存する作品や歌合の記録類が多い。後冷泉朝期は奇しくも『更級日記』と同様に、横断的な手法による生成と享受の研究が有効な時代である。第二部ではそれらを個々の作品研究という視点ではなく、時代における生成と享受の研究という視点からトータルに論じる。所属も地位も異なる女房達の関係性や創作態度、享受の姿勢といった諸相を、「融和」「共有」とは別の観点から論じた。

第一章 「左右」の修辞法の展開——紫式部から後冷泉朝へ——

平安時代の仮名文学では、「左右」の語が「左と右」の意味だけでなく、「あれやこれや」「身近に」等の特殊な意味でしばしば使用される。これは『万葉集』等の上代の用法や、漢文的な修辞に起因するようである。さらに、「左右」という一語にこれら複数の意味を重ね合わせる「ひだりみぎに苦しく」思う（『源氏物語』空蟬巻）というような、特殊な用法が確認できる。平安時代の二世代の用例群を調査し、この用法の展開を検討した。

具体的には、一世代目として一条朝時代の紫式部を、二世代目として後冷泉朝時代の菅原孝標女等を対象に、同時代の歌集や歌合の資料も含めて網羅的に調査、検討した。

その結果、「左右」に関する書き手たちそれぞれの個別の特徴、すなわち紫式部が三つのパターンを用いていることや、菅原孝標女が「身近に」の意味を多用していること等が確認でき、さらに各時代の文芸圏それぞれの特徴、すなわち同僚女房であった紫式部と赤染衛門の交流の可能性等も同様に確認できた。「左右」の修辞法は二世代を通じて確かに継承、変遷を経ていたといえる。

第二章 『狭衣物語』における源氏の宮付の女房達——男君への応対を中心に——

つくり物語には女房達のさまざまな活動が描かれるが、『狭衣物語』の齋院源氏の宮の周辺では、複数の女房が客人狭衣に対して、からかうような応対をする場面が集中して見られる。このような応対は女房日記においてはなじみ深いものであるが、つくり物語においてはそこまで多くないようであり、源氏の宮付の女房の特徴として注視される。

齋院となる源氏の宮は、『狭衣物語』の作者「宣旨」が仕えた実在の六条齋院祿子内親王と重なりあう登場人物であり、そこに仕える女房集団も実在の女房集団と重なりうる。

『狭衣物語』に登場する源氏の宮付の女房では、まず「宣旨」「女別当」が注目される。作者及びその同輩と同じ伺候名を持つ彼女達は、作中で主人公狭衣をからかい、応援している。ここからは作者の自己主張や紐帯意識等が看取できる。また、好色で挑発的な「新少将」という登場人物や、『源氏物語』の柏木を実見したという語り手の女房の存在も確認できる。

右のような女房集団が登場することから、物語内において齋院源氏の宮の才気や特異性が読み取れること、そこに実在の祿子家女房達の姿が見え隠れするようであるということ論じた。

第三章 『狭衣物語』の「大式三位」と大式三位藤原賢子

物語の結末部における狭衣帝の乳母「大式三位」は、同時代の実在人物である大式三位藤原賢子を想起させる。この「大式三位」は実在の賢子と共通する要素を複数持つと同時に、物語の結末部における狭衣の在り方とも呼応する人物である。『狭衣物語』の作者「宣旨」は、明確な意図をもつてこの脇役を登場させたと考えられる。

「大式三位」は物語前半部では「大式の乳母」等と呼ばれ、狭衣思いの親身な乳母として描かれる。ところが、結末部の狭衣帝即位において「大式三位」と呼称が改まるに従い、權威的な天皇の乳母という人物に変貌するのである。実在の賢子との共通点には、「大式三位」という伺候名や天皇の乳母という地位、親族の縁故任官による大宰大式就任、天皇側近として權威的な存在であったこと等が挙げられる。これらでは実在の賢子に対する揶揄も受け止められるような描写がなされている。また「大式三位」は狭衣帝の憂愁を前景化させる人物ともなっている。

これらを考え併せて、『狭衣物語』の作者「宣旨」は、物語結末部において実在の賢子を揶揄、戯画化しながら、それを主人公狭衣の最終的な在り方の描出に利用しているのではないかと論じた。

第四章 『四条宮主殿集』における恋の歌群の遍在

『四条宮主殿集』は後冷泉天皇の后妃寛子付の女房、主殿の家集である。この家集は軽薄な人生を歩んだことを自省する序跋を持ち、「恋と社交生活」の歌を収めた前半六五首と「出家後の詠」の歌を収めた後半六五首からなるシンメトリカルな構成をとっている。このため、仏道的な懺悔がテーマであるという議論が従来支配的であった。

しかし、家集からは仏道的なテーマだけでなく恋のテーマも遍在的に確認できる。具体的には、家集前半に恋の要素があることは当然だが、家集後半のみずから髪を切る歌群が、当時の言説や歌群の配列を勘案すると、男女関係のスキヤンダルの要素を持つという点と、出家後の男達と決別する歌群が、共寝を想起させるような恋の延長線上の表現を持つ、官能的ともいえるやりとりである点が挙げられる。

これらの家集全体にわたる恋の要素から、主殿の主家周辺に対する読者意識と、主家周辺からの主殿に対する家集編纂の要請がうかがえるのではないかと論じた。また、併せて主家の寛子周辺には歌集を重視する機運があり、『主殿集』は主家の文化的な權威の誇示にも結び付きえたのではないかと論じた。

第五章 後冷泉朝における后妃文芸圏と内親王文芸圏の位相

後冷泉朝の文芸は融和的、共有的と認識されており、かつこの時代には文芸活動が盛んな后妃家や内親王家が複数存在する。ところが、各家の文芸圏を捉え直すと、一見して后妃家には家集が、内親王家には物語作品が目立つという印象を受ける。

頼通の養子である祐子内親王の周辺では、家集も伝存するが物語作品や日記作品、物語に精通した女房達が目立つ。その妹の祿子内親王の周辺では、物語と歌合の記録のみが伝存し、

天喜三年の物語歌合の関連資料や『狭衣物語』の叙述態度から、物語に長じた宮家であったことがうかがえる。一方、后妃である章子中宮と寛子皇后は、それぞれ『出羽弁集』や『四条宮下野集』等の女房家集のみが伝存しており、主家周辺の記録という要素を持っている。両后妃家には仮名散文の作成に長じていたとおぼしい女房達が所属するが、物語等は伝存していない。

以上のことから、后妃の周辺では主家を記録して、すみやかに対外へ発信できる家集、ないしは歌群の冊子が好まれたこと、内親王は后妃と比較して、周辺を記録する機運が相対的に生じづらく、より多様な性格の作品が生成されうる土壌を持っていたことを指摘した。そして後冷泉朝期の女主人及び女房達の層の厚さがこの状況を可能ならしめ、伝存作品の分布があたかも分業化されたかのような状態になったのだろうと論じた。

*

終章では、本論文全体の成果を改めてまとめた上で、第一部における『更級日記』を同時代の中で捉える営みと、第二部における同時代性から諸事を捉える営みが、互いに補完しあうものであることを確認した。

また、後冷泉朝前後の文芸は「融和」「共有」という時代的な特徴に加え、「専門化」や「分業化」といった特徴も見出せるのではないかという展望を示した。これは、各章の個別の指摘が、『更級日記』や後冷泉朝の文芸における総体的な究明につながったことによる見通しである。